

第四十二回 庭野平和賞贈呈式 ご挨拶

公益財団法人庭野平和財団 名誉会長 庭野 日鏡

本日は、「第四十二回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を「ムサーワー」の皆さまにお贈りできますことは、大変光栄なことでございます。選考にあられたムハンマド・シャフィーク委員長さまはじめ、庭野平和賞委員会の皆さまに深く敬意を表する次第であります。

只今、シャフィーク委員長さまから選考経過のご報告がありましたように、「ムサーワー」は、イスラームの平等観をもとに、男女が等しく大切にされる社会を目指す世界的な運動体であります。

私は、これまで世界の諸宗教の方々と対話をする機会がありましたが、あらゆる宗教の根底には、共通する普遍の真理があることを強く感じました。

真正の宗教は、本来、世界は一つであり、生きとし生けるものは、皆等しく尊いことを、共通して説いています。

以前、私は、ある日本の高名な僧侶と名刺交換をしました。そこには次のような一文が添えてありました。

『花の美しさに序列はない。人間を点数で評価するのはやめよう』と。

ここでの「花」とは、単なる植物の花ではなく、全ての人々、全てのいのちを指したものであろうと思います。まさに、いのちの尊さに序列などないということでもあります。短い言葉の中に宗教の核心が込められていて、強く心を打たれました。

宗教の世界は、他と比べたり、競争し合ったりすることのない安心の世界です。各自の尊厳（絶対の価値）を互いに自覚し、合掌・礼拝し合う世界です。「ムサーワー」の皆さまは、そうした宗教の本義を十分認識されているからこそ、いま、この運動に取り組まれているのでありましょう。

さて、人間社会の中で、女性は、家族を一つにまとめる最も重要な役割を

果たしています。子育て、家事はもちろん、家族全員の精神面も支えています。まさに一日中、さまざまな事柄に心を配り、力を注ぎこんでいます。

そうした働きは、地味で、人の目に触れることはありません。世間から評価されることもありません。しかし、この尊い営みは、いわば人間としての大事業であり、心から讃嘆しなければならぬと私は思います。

東洋思想の泰斗として知られた安岡正篤氏の次のような言葉があります。

『世に母の徳ほど尊く懐しいものはあるまい。母は子を生み、子を育て、子を教え、苦しみを厭わず、与えて報を思わず、子と共に憂え、子と共に喜び、我あるを知らぬ』と。

皆さまも深くうなずける言葉ではないかと思えます。

日本の古典では、「愛情」の「愛」という字をあてて、「愛（かな）し」と読みます。子供を愛するがゆえに、その先行きを心底から案じ、悲しむ母の心情を表しているといわれます。

実は、この「悲しむ」ということが、人間の情緒の最も尊い働きの一つであるといわれます。自分の子供など身近な人はもちろんのこと、地域の人々のこと、世の中のこと、国のことを悲しむようになって初めて、真の文明人、文明国であると教えられています。

いうまでもなく、女性は、優しさ、温かさ、思いやり、分かち合いなどの心が豊かです。そのような特長は、生産性、合理性を重んじる競争社会において極めて重要な意味を持っており、それが生かされてこそ、国や社会が調和し、やがては地域に一つのオアシスが築かれていくのだと信じます。

女性が大切にされる社会の実現に向けて尽力されている「ムサーワー」の皆さまに改めて心から敬意を表する次第であります。

本日の贈呈式を契機として、「ムサーワー」の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、また「ムサーワー」の皆さまが、これまで同様に活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。